

＜事例 2＞中学校

I 研究テーマ

中学校段階における探究的な学習の在り方

～中学校段階における探究的な学びを可能にする学習活動についての実践事例～

II 研究の概要

1 本校の概要

本校の学校教育目標

＜自ら考え自ら学ぶ生徒＞＜誠実で思いやりのある生徒＞＜たくましく行動する生徒＞

本校は、羽生市の西部に位置し、通学区は利根川を挟んで群馬県と隣接している。生徒数は、550名程度の中規模校である。伝統的に緑化活動が盛んであり、また、生徒会を中心に福祉活動も積極的に取り組むといった特色がある。

平成9年度から、生徒会の提案でノーチャイム(1日2回のチャイムのみ)を行っている。常に時間を意識した生徒の自主的行動は、主体的な学習活動にもつながっている。

また、保護者や地域社会も学校への関心は高く、大変協力的である。

2 本校、総合的な学習の時間の歩み

平成14年度より、本校の総合的な学習の時間は、現在のような形式で実践されるようになった。しかし、移行期間における3年間は、試行錯誤の連続であった。

＜3年間の変遷＞

(◆取り組み前の考え、○実際の取り組み、★分かったこと)

STEP <1> H12年度 総合的な学習の時間とは何か

◆「生き方」を学ぶらしい

○「遠き落日」(野口英世の自伝)をビデオ鑑賞

★突然のビデオ鑑賞から何が得られたのか

STEP <2> H12年度 さつまいも栽培

◆本校の特色のひとつ「さつまいも栽培」を組み入れてみよう

○狭い畑の中に260人全員が活動

★学年全員で同じことをやるには無理がある

STEP 〈3〉 H12年度 3 days チャレンジ

- ◆生き方＝進路。3 days チャレンジも組み入れてみよう
- 生徒との打合せと挨拶指導、模造紙へのまとめと発表練習
- ★3デイズチャレンジは特別活動である。（※H12年度当時の考え）

STEP 〈4〉 H12年度 スキー学校

- ◆スキー学校を「総合的な学習の時間」として実施
- 全員が活動する時間は、ほんの数時間（ビデオ、学年集会、挨拶指導）
- 学校行事は実行委員の活動が中心
- ★特別活動はどんなにねらいを変えて、総合に組み入れても時間が余ってしまう。
- ★ねらいに沿った活動まで高めることができなかった。

STEP 〈5〉 H12年度 課題解決的学習への取り組み

- ◆先進校の取り組みを基に課題解決的な学習をしてみよう
- テーマ「自然」で課題を設定
- 調査場所 図書室100人、コンピュータ室60人、市立図書館100人
- 260人全員が「自然」をテーマにしたため、本が不足する。
- ★テーマは分散した方がよい。

STEP 〈6〉 H13年度 「ふるさと再発見」スタート

- ◆H12年度の取り組みを踏まえ、年度初めから課題解決学習に取り組んでみよう。
- 羽生市の「文化」「歴史」「環境」「福祉」「産業」をテーマに活動を行う。
- 思った以上に時間を要する → 課題設定と計画立案で1学期が終了
- 思った以上に充実している生徒たち → 活動後の喜びの声
- 校外学習(2月予定)の関係で10月で終了 → 調べてまとめて発表で終わる
- ★「調べる→まとめる→発表する」だけでは調べ学習で終わり、「生き方」にまではつながらない。
- ★「自分たちにできること」「社会にどう関わられるのか」が必要である。

STEP 〈7〉 H13年度 「ふるさと再発見Ⅱ」スタート

- ◆ようやく「総合的な学習の時間」がみえてきた。
- 担当者が一人ひとつの「ゼミ」を開講

- カリキュラムに「生き方」につながる活動を組み入れる
- 調査活動を深めるため、行動範囲を広げる必要がある→1日まとめ取りを計画
- 学年の曜日が違うため、授業の組み替えは不可能
- 「特別活動」である校外学習はねらいを変え、「総合的な学習の時間」の1日調査活動にあてる→実行委員会を発足する必要がなくなる

★現段階で「特別活動」と「総合的な学習の時間」の関連を図るとどちらのねらいも達成できない。

★自治的・自発的な態度を育てるためにも「総合的な学習の時間」と「特別活動」は切り離す。

★1日まとめ取りを行うには、全学年を同じ曜日と時間に設定することが必要

STEP〈8〉 H14年度 「きらめきタイム」スタート

- ◆羽生西中の特色「共生」を全面に出し、取り組んでいこう。様々な分野で「生き方」につながるカリキュラムの開発が必要だ。
- 担当者が「共生」を大テーマとして、一人ひとつの「ゼミ」を開講

3 本校、総合的な学習の時間における3つの柱

これまでの歩みと本校の特色をもとに、学校教育目標の具現化を図るため、総合的な学習の時間における目指す生徒像を

- 社会の中で起こる事柄を共生の視点でとらえ、自分の生き方を考えられる生徒
 - 自ら課題を設定し、自ら学び、自ら行動する生徒
- とした。

また、具体的な実践については、共通のテーマを「共生」とした課題解決的学習を取り入れることで、学校教育目標が達成できると考えた。

そして、これまでの取組を自己点検・自己評価し、生徒がより主体的に学習に取り組むための柱として次の3点を設定した。

- 1 「共生」をテーマに社会との関わり合いをもつ活動を取り入れる
- 2 目的を明確にし、意思をもった活動を行わせる
- 3 「思考の時間」を設け、活動の意義を理解させる。

特に、「目的を明確にする」ことで、どの活動段階においても常に何のための活動なのかがわかり、生徒の活動がより主体的になると考えた。

4 総合的な学習の時間「きらめきタイム」

(1) 「きらめきタイム」

本校の校歌に「**光れ** 羽生よ 西中かおれ」という歌詞がある。生徒が生きる力を身に付けるたびに放つ光には、集団としての「**かがやき**」と個人としての「**きらめき**」がある。総合的な学習の時間では多様な学習形態を活用しながらも最終的には個人の「知」の成長を目的としている。総合的な学習の時間を通して、一人一人の生徒が生きる

力を確実に身に付けることにより、一層きらめくことを願い、本校では総合的な学習の時間を「きらめきタイム」としている。

(2) 「共生」のとらえ方

生命概念を基軸に人間個々のレベルから文化・社会のレベルを経て、地球の生態レベルまでを含むものであり、人間の生存に関わる諸課題を包括的に表現する言葉と捉えられる。

そこで、それらの諸課題と向き合い、自分、あるいは自分たち人間がいかにして共に生きるかを考える対象として、「人」「もの」「ことがら」の三つの柱を設定し、捉えていく。

- ・「人」と共に生きる
- ・「もの」と共に生きる
- ・「ことがら」と共に生きる

(3) 具体的な学習の進め方や特徴

① 学習方法

問題解決的な学習であり、生徒がそれぞれ具体的な課題を設定し、自分の課題の追究・解決を目指す。

② メンバー構成

個人で決定したテーマのグループをつくり、その中で似たテーマの生徒同士で数名のグループをつくる。あるいはテーマグループの中でいくつかの課題を出し合い分担してグループをつくる。また、共通の学習課題のない生徒は一人で自分のテーマを追究する場合もある。

③ テーマ決定まで

学年ごとに担当者が「共生」に関するテーマをもとに、一人一つのゼミを開講する。ゼミに関するオリエンテーションを受け、オリエンテーションの内容をもとに、いずれかのゼミに所属する。そして、所属したゼミの中でより具体的な課題を決定する。

④ 課題解決の場面

自分なりの課題解決の見通しをもつために、活動計画を立てて学習を開始する。学校から外に出て施設などでの見学や調査、学校内外での実験や観察、インターネットなどの情報利用、図書やビデオの利用、アンケートの実施、共同研究者との討論や中間発表会の活用など幅広い学習をゼミの中で展開していく。自分たちのペースを基本として進め、必要に応じていつでも教師と相談していく。

⑤ 社会との関わり

調べたり体験したりしてわかったことを通して、自分に何ができるのかを考えさせ、社会に対して何らかの関わりをもつことで、自分の「生き方」を考えることにつなげていく。

⑥ まとめや最終発表の場面

学習の途中での発表や最後のまとめについて以下のような多様な方法を取り入れる。

- ・ビデオメッセージ、HPの作成
- ・ポスター、壁新聞、紙芝居
- ・レポート、作文、アンケート調査
- ・劇、演奏、作詞、作曲、実験、実習 他

(4) ゼミ制について

① ゼミ制でめざすこと

- ・追究やまとめの段階で指導する
- ・援助の充実を図る
- ・教師の特性を生かす

- ・運営面の簡略化を図る
- ・問題解決学習、学び方の充実を図る

② ゼミの内容

大テーマである「共生」をもとに担当教師の興味や関心、専門性を活かしたもの、または、昨年度までに実施されてきた主な内容や方法に関するものを考慮してゼミを開講する。その際、『目的』と『身に付けさせたい力』を明確に設定する。

③ 評価

活動全体を通して、ポートフォリオを使用し、最終的なまとめの段階で凝縮ポートフォリオを行い、知の再構築化を図り、自己評価、教師との共同の評価、教師による評価が行えるようにする。

また、「課題設定」「計画作成」「情報収集」「制作」「まとめ」「発表」など各活動の前後に、「思考の時間」を導入し、各段階における自己評価を行う。内容としては、活動前では、その活動の目標、意義、効果的に行うには、等。活動後には、成果、自己の成長、等を行う。「思考の時間」を導入することにより、総合的な学習の時間が単なる活動ではなく、考える力をのばす学習になっていくと考えている。

5 全体計画

平成 20 年度 総合的な学習の時間 全体計画		
生きる力の育成		
学習指導要領 教育改革の動向 教育課程の基本方針 県教委の指導の重点努力点 市教委の指導の重点努力点	羽生市立西中学校 学校教育目標 ○自ら考え、自ら学ぶ生徒 ○誠実に思いやりのある生徒 ○たくましく行動する生徒	地域や学校・生徒の実態 社会の要請 教師の願い 保護者や地域の願い
総合的な学習の時間教育課程編成上の基本的な考え方		
各教科等の活動	「総合的な学習の時間」のねらい・育成したい力	他の教育活動等の充実
【研究内容】 自ら課題を見つけ、自ら学び、解決する中で、生きる力を身につける。 1 体験的・問題解決的な学習及び自主的、自発的な学習を促進する。生涯にわたる学習の基礎を培うため、観察・実験、調査・見学、課題学習などの活動を重視する。 2 指導方法や指導体制の工夫改善など個に応じた指導を充実させる。学校や生徒の実態に応じ、個別やグループ別指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導教師の協力的な指導など。	【ねらい】 ○自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断し、自ら行動するという学習を通して生きる力を身につける。 ○自分の身の回りの世界や国際社会の中で起こる事柄を見つめ、自分の生き方を考えられるようにする。 【各段階における育成したい力】 共通授業 ・自分と社会の関係を意識する力 ・時代の表象を見る力 課題設定 ・目標を立てる力・課題を見出せる力・提案する力 活動計画 ・想像する力・企画する力 ・構築する力 情報収集 ・予測する力・事態を理解する力・状況を判断する力・変化に対応する力・真実をもとめる意志 ・メディアリテラシー 製作実践 ・情報を取捨選択する力・話し合いまとめる力 ・想像する力・チームワーク・社会に関わろうとする 発表 ・表現する力 ・プレゼンテーションスキル 評価 ・自己評価する力 ・相互評価する力 ※1 学習の再構築 ・重要なことを見出す力・情報を取捨選択する力 ・簡潔に表現する力・構成する力 ※2 思考の時間 ・自己評価する力 ・自分をより高めようとする意欲 ※1…活動の様子を見ながら、年間数回行う。 ※2…各段階の間に必ず位置づける。	・家庭や地域との連携、協力の強化を一層図り、開かれ学校づくりを推進する。 ・学校図書館やコンピュータなど学習環境の一層の充実を図る。 ・学校行事の充実・改善を図る。 ・教育課程全体として環境や福祉に係る活動、ボランティア活動などを適切に位置付け、その充実を図る。 ・教育委員会及び公共施設や地域の施設等との連携を一層強化する。
総合的な学習の時間 カリキュラム編成		
年間授業時数	1, 3 学年 (70)	2 学年 (50)
学習テーマ	共生に関するテーマ (社会問題を取り上げる) ・福祉・環境・国際理解・人権	2 学年 (20)
学習形態	・ゼミ・課題別グループ・個人	職場体験学習
評価	・育成したい力を基に観点を定めて評価	
担当する教師	・各学年の職員が担当 ・その他、研究組織推進、地域人材活用	
学 習 過 程		
段階 各段階の内容		
共通授業 (体験) 基礎的な事項の理解と活動への意欲付けをする。		
課題設定 目標達成の要素を考え課題を設定する。		
活動計画 課題を解決するための活動計画を立案する。		
情報収集 課題を解決するための情報を収集する。		
製作実践 作品の製作や実践を通して社会と関わりをもつ。		
発表 さまざまな方法でプレゼンテーションをする。		
学習の再構築 凝縮ポートフォリオで今までの学習を再構築する。		
評価 ポートフォリオから自分の成長をエントリーする。		
思考の時間 前段階の自己評価及び次の活動で身に付ける力を知る。		

各学年、ゼミ制による活動を年間通じて実施していく。ただし、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、第 2 学年のみ「職場体験学習」における活動を一部取り入れる。

本年度のゼミは、第 1 学年 7 ゼミ、第 2 学年 6 ゼミ、第 3 学年 6 ゼミ、計 19 ゼミを開設し、実施している。

本事例は、19 のゼミの 1 つ、第 2 学年「未来都市羽生創造計画～羽生のよさを P R しよう～」について、紹介する。

6 単元名（ゼミ名） 「未来都市羽生創造計画～羽生のよさをPRしよう～」

7 目標

社会問題が身近なものであることを知るとともに、自らの問題としてとらえ、解決に向けて主体的に関わることによってよりよく生きようとする事ができる。

8 評価規準

段階	評価規準	身につけさせたい力
課題設定の能力	「共生」に関する問題に対して、目標をもち、その達成に向けて、適切な課題を設定することができる。	・時代の事象を見る力 ・目標を立てる力 ・課題を見出せる力 ・提案する力
課題解決の能力	課題解決のために必要な情報を見抜き、的確に収集し、処理することができる。	・想像する力 ・企画する力 ・予測する力 ・事態を理解する力 ・状況を判断する力 ・変化に対応する力 ・メディアリテラシー
学び方ものの考え方	必要な情報を取捨選択し、重要なことを見出し、論理を構築することができる。	・情報を取捨選択する力 ・話し合いまとめる力 ・重要なことを見出す力 ・構成する力 ・表現する力 ・プレゼンテーションスキル
学習への主体的・創造的態度	目標達成に向けての意欲をもち、進んで社会に関わろうとすることができる。	・目標を達成しようとする意欲 ・社会に関わろうとする意欲 ・真実をもとめる意思
自己の生き方	体験活動を通して、自分と社会の関係を意識し、望ましい生き方を自覚することができる。	・自分と社会の関係を意識する力 ・望ましい生き方を自覚する力

9 単元計画（活動計画）

月	日	時間	学習過程	活動内容
5	20	2	課題設定	オリエンテーション・アンケート・テーマ決定
	28	2		基礎学習①②
6	3	2		基礎学習③④
	18	2	計画立案	共通授業「羽生市への願い」 共通授業「良いまち大賞入賞に向けて」・課題設定
	25	2		羽生市の実態視察・計画立案
7	2	2	情報収集 制作	情報収集
	9	2		情報収集
9	3	2		作品制作
	10	2		作品制作
	17	1日		情報収集
10	24	2	発表・評価	中間まとめ
	15	2	職場体験学習に向けて① 職場体験学習に向けて② 職場体験学習に向けて③ 職場体験学習1日目 職場体験学習2日目 職場体験学習まとめ① 職場体験学習まとめ② 職場体験学習まとめ③ 職場体験学習発表リハーサル 職場体験学習発表会・評価	職場体験学習に向けて①
	22	2		職場体験学習に向けて②
	29	2		職場体験学習に向けて③
11	5	1日		職場体験学習1日目
	6	1日		職場体験学習2日目
	12	2		職場体験学習まとめ①
	19	2		職場体験学習まとめ②
12	3	2		職場体験学習まとめ③
	10	2		職場体験学習発表リハーサル
	17	2		職場体験学習発表会・評価
1	14	2	情報収集	情報収集
	21	2		情報収集
	28	2		情報収集
2	4	2	制作	情報収集
	18	2		意見書の制作①
	25	2		意見書の制作②
3	4	2	発表	意見書の提出・発表練習
	11	2	評価	全体発表・評価

<これまでの経過>

中学校における探究活動は、実社会とのかかわりを具体的にもたせることによって、その目的に「切実感」を生じさせることができる。本活動の最終的な目的は、市役所の関係課への中学生としての提言をすることである。

そこで前段の取組として、「埼玉住み心地の良いまち大賞」《主催》埼玉県住まいづくり協議会《後援》埼玉県 埼玉県教育委員会 への応募を通して、生徒の活動意欲を高めることとした。共通のテーマをもった生徒によるグループを編成し、インターネットや図書、市内の実地調査を繰り返し行い、探究を深めていった。また、グループ編成前に、応募作品は、個人で作ることを指示しておいたため、グループ活動を行いながらも、生徒個々の視点で調査を行うことができた。次の展開例は、調査活動した結果を応募のルールに従って、制作したときのものである。

10 展開例（本時 17,18 時間目）

（1）目標

- ・制作を通し、地域にかかわろうとする意欲をもつ。
- ・これまで収集した情報の中から、必要な情報を取捨選択することができる。
- ・想像力を働かせ、羽生市のよさを伝える作品を作ることができる。

（2）展開

学 習 活 動	・支援 ○評価
	○本時の課題を捉え、主体的に活動して いろいろと する。
「良いまち大賞」への応募作品を通し、羽生市のよさをPRしよう	
・「良いまち大賞」の応募に必要な条件を確認する。	・事前に配布してあるプリントで確認させる。
・制作に必要な情報及び資料の確認をする。 ・制作に必要な道具を確認する。	・テーマ ・推薦理由 ・写真または絵 ・地図
2 制作を開始する。	・これまでの活動を通し、準備してきた 写真とその情報を机上に準備させる。 ・制作が「目的」ではなく、羽生市をPRするための「手段」であることを確認させる。 ・レイアウト等、見る人の立場を考えた制作に努めさせる。 ・いい制作状況にある作品は、途中でも全体に紹介をする。 ・取組の一環として、記録を残すことを指示する。

3 完成作品をデジカメで撮影する。 4 チャレンジシートに記入する。	○情報を選択しながら、羽生市のよさを伝える作品を作ることができたか。 ・本時を振り返って、シートにまとめさせる。 ○新たな課題をもつことができたか。
--	---

(3) 指導の実際 (記録提供者: H20 長期研修教員)

時 間	教師 (発問・動きなどの関わり)	子ども (発言・表情・行動など)
13:45	「先に資料を配りましたが、今日は羽生市のよさをPRするために (良いまち大賞へ応募する) 作品を仕上げてもらいます。」 「インターネットやデジカメで写真を撮る等様々な方法で情報を入手してきましたね。」 「良いまち大賞へ応募するために 4 つの条件がありました。」 ① <u>タイトルを入れる</u> ② <u>推薦理由を入れる</u> ③ <u>写真やイラストなどを入れる</u> ④ <u>地図を入れる</u> →作品の条件の確認 「(生徒が撮ってきた写真の) プリントアウトは注意して行ってきましたが、間違えて写真がなかった場合は、作品の写真を貼るところをあけて下さい。」 「大事なことを言います。×切は 9 / 12 です!! (※本時は 9 / 10) 必死に頑張らましよう。質問はいつでも受けます。」 「写真の切りはがしをする人と、それをグルー	  ※×切が間近に迫っているため、少し苦笑いを浮かべる生徒がいた。 作業を開始する。

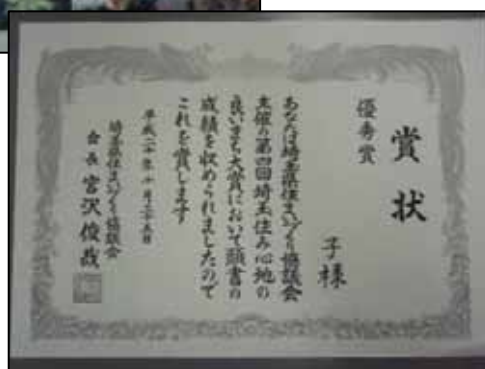
	13:48 プの人に渡す人に分かれてやりましょう。写真の交換で席を動いてもいいですからね。」 ※教室をくまなく周り、生徒たちの作業の様子を見る。作業が進まない生徒に対しては、適切なアドバイスを送っている。 13:55 「あっ！大事な約束。（作品作りの）紙は横だよ！！」 「えっ！？」 「（折っても）いいです。」 →教師と生徒の会話の言葉づかいを配慮 13:59 「やっと制作に入り始めましたが、この作品を完成させることも目的なんだけど、あくまで羽生のよさをPRするのが目的だよ。相手（作品を見る人）に羽生市のPRを伝えるためには白黒では伝わらないから、色を使うなどして相手のことを考えて作ってください。」 →ゼミの目的と照らし合わせるとともに、見る側の立場を考えさせる発問 14:00	【生徒の学習状況】 ○インターネットから引き出した資料の中から、作品作りに使えそうな資料を探す。 ○白地図の中の羽生市の部分を色づけする。 ○作品の完成のイメージをレイアウトして紙に記しておく。 ○インターネットで調べてきたことをメモして、まとめる。 C：「先生、紙は折っちゃダメなの？」 C：「あっ、紙は折っちゃダメなんですよね。」 ※色を使いながら、直接紙に書き始める。 ←「運動のさかんなまち」（埴）陸上競技場をはじめ、運動施設が多い
--	---	--

14:07		 ←これで「アイラブ 羽生シティ（cityをもっている）」 ※生徒一人一人の個性がでて、作品のおもしろが多々見られた。 C：「質問ですが、題名は何でもいいのですか？」
14:15	（生徒が考えた写真の構成を見ながら） 「道がつながっていく、というイメージでなかったかな？」	C：「これをこうして・・・。」といいながら写真の場所を動かしていく。
14:18		 ←羽生へキヤッセ ◎集中して制作活動している。 ◎学び合い→友だち同士で意見交換しながらよりよい作品作りを目指す姿 
14:25		※悩んでしまい作業の進まない生徒もいる。
14:28	「途中経過として、順調に進んでいる人の作品を紹介します。」	C：（作品を観て）「おおーっ！！」

14:30	→作品作りのヒントや 「ああいう風に作れば いいんだなあ。」とい う見通しをもてるよう になる 「まだ6時間目がありますが、自分のペース（ トイレや水飲みなどの）を考えて制作を行って 下さい。」	 ひたすら取 り組む生徒
-------	---	---

（４）その後の活動

本ゼミに所属している31名全員が、それぞれの持ち味を生かした作品を完成させ、「埼玉住み心地の良いまち大賞」に応募することができた。その後の作品審査において、1名の作品が「優秀賞」へと結びついた。このことは、その後の活動意欲をさらに高めることにつながった。



III 研究のまとめ

<成果>

- 課題解決的学習を取り入れることで、生徒の高い興味・関心のもとで探究学習を進めることができた。
- 「共生」を大テーマにしたことで、現代社会の抱える問題に気付き、共生の心を育むことができた。
- 目的を明確にすることで、見通しをもった計画を立てることができ、各活動が意思のあるものとなった。
- 思考の時間を設け、自分の成長を評価することで、次の段階への確かな力となって表れた。

<課題>

- 各ゼミの取り組みが実生活にも結び付けられるよう改善を図る。
- 「共生」をテーマとしたカリキュラムの開発を継続して行う。
- 各段階での身に付けさせたい力をより明確にし、その力を意識した活動を行わせる。
- 教師の支援のあり方を研究する。

中学校段階における探究学習は、各教科等で得た知識や心身の発達により、小学校以上に、その学びに広がりや深まりが期待できるものである。しかし一方で、発達段階に伴う思春期特有の要因により、純粋に取組ができない生徒もいる。このことを少しでも改善し、よりよい取組にするために、方策として述べた 3 つの柱は効果的な手段であると考える。今後も、生徒たちの興味・関心を引き出し、探究的な学習がより充実したものになるよう努力していきたい。

また、本中学校区内にある小学校との連携を図り、総合的な学習の時間において、各小学校で実践してきた地域単元についての情報を交換する機会を設けることで、小学校での学びを生かした学習活動を展開していきたいと考える。